
雪原アポカリプト

誇大紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪原アポカリプト

【Nコード】

N0890T

【作者名】

誇大紫

【あらすじ】

筆箱を盗まれた小学生、二田次郎は放課後、犯人である長田勇次の机を探る。しかし見つからず、かわりに長田の巾着袋を取って隠すことにする。数日後、長田は突然行方不明になってしまう。やがて小学生達の間で「放課後、長田が何かを探して校内を徘徊している」という噂が流れ始める……。

(前書き)

一部、ちょっとだけグロいかもしれません。

地球温暖化なんてよく知らないしどうでもいいが、とにかく今年は雪が降らなかった。だから近所の林にある汚い沼は年中腐臭を放っていたことになる。剥き出しの怖ろしく汚い沼。

世の中は不法投棄物に溢れた沼だ。混沌として不可解。「どうしてこんな怖いものがここに？」という謎はいくらでもあるが、誰もそんなもの突き詰めて考えない。何故ならそこに答えも意味もないからだ。たとえ合理的解釈でその答えを出したとしてもそれはただ安心したいだけのまじないじみた仮説であって混沌の沼に簡単に飲み込まれてしまう。

怖いものは怖いまま、存在だけがただそこにある。謎は解かれないう。真実なんてものはタマネギ状になっていて、剥けば剥くほど意味の空白が晒されて涙が出やがる。

もう十年以上前になるが、その年は異常な寒さだった。

俺の町は滅多に雪が降る所じゃないが、当時は三月も半ばにして連日の雪が日差しに溶けきらず残っちまうくらいだった。

朝を迎えると雪が前日より増えている。それがもう十日ぐらいは続いてた。大人達は一体いつまで続くか不安がってたが、小学六年生の俺や二年生の妹はわりとワクワクした気分で登校してた。同じクラスの皆も非日常っていうのか、そういう気分ではしゃいでたよ。

そんなある日、俺の筆箱がなくなったんだ。珍しいことじゃないんだ。それまでもウチのクラスじゃよく物がなくなってたからな。

俺は教室の後ろにある小さな黒板に向かう。「プロミスリング（占部久美）」「国語の教科書（横浜ひで夫）」「エヴァ初号機のキールホルダー（酒井麻子）」の下に続けて「ゾウの筆箱（二田次郎）」と書いた。そこは「みんなのなくしたもののリスト」なんだ。

皆一応いつも犯人を探すフリはしていて口にこそ出さなかったが、無口で貧乏ですぐ殴るクソ長田勇次の仕業だってわかっていた。でも疑えば長田に殴られるから黙っている。特に横浜ひで夫はよく理由もなく殴られていた。殴られて「へへ」と愛想笑いするマゾ野郎だった。

クラス担任の辻先生も長田が悪いって薄々わかってたと思う。でも俺が職員室で長田に筆箱を取られたであろうことをはっきりチクると、辻先生は次の日学級会を開いて泣きながら言った。

「皆さんの中に犯人がいるとは思いたくありません……」

辻先生は俺が五年生の時に出産で休んで、復帰してからというものすぐに泣き出すようになっていた。体質が変わっただけらしい。それでも大人が涙を流している姿を見ることの少ない俺達はまんまと言うことを聞かされてしまう。涙の数だけ強くなれるよ。徳光和夫最強説。涙は誰かを脅迫するし、時には自分の思い通りに物事をコントロールできる。涙の数だけ強くなるってのはそういうことだ。とにかくそんなわけで皆、犯人探し自体を簡単にやめちまったんだ。平和的解決。冗談じゃないだろ。俺の筆箱はどうなるんだよ！俺は当時最強だと思ってたキラーマシンのバトル鉛筆（懐かしいな）を筆箱に入れてたこともあって、どうしても許せなくて放課後に長田の机を探ったんだよ。

結論から言うと、筆箱は無かった。

他の奴の机と違って教科書も置いてないし、なんだかゴミばっかりだった。まともに使われてないって感じでさ。

「なんでないんだよ。さては持って帰ったか……」

俺はかわりに何か隠してやろうって気持ちで、机の横に掛けてあった巾着袋を持ち出した。いい隠し場所が思いつかなかったが白く覆われた中庭を見て閃いた。

「そうだ雪に隠そう」

その晩、家に帰った俺は窓の外を見て笑った。思った通りの吹雪だったからな。

翌朝、学校に來た長田は机のあちこちを調べていた。しばらくして無いことに気づいたらしく机を蹴る。誰にともなく罵倒の言葉を吐きまくりゲホゲホとむせた。バーカ、お前の巾着袋は現在絶賛冬眠中なんだよ。

俺は頬杖をついて見てたんだが、不意に奴と目が合った。いつも同じ汚いトレーナーと死んだように虚ろな目。俺の心臓は怯えて暴れだしそうだったがなんとか素知らぬふりを通した。

それから長田は学校に來なくなり家にも帰らなかった。辻先生の話だと家庭がうまくいってなかったらしく、家出だと言っていた。心当たりのある人は、と聞かれて誰も手を挙げなかった。

ウチのクラスでは相変わらず「なくしたもののリスト」に眼鏡や時計が書き込まれて増え続けていた。長田はもういないはずなのに、だ。

そんな時、帰りが遅くなった横浜ひで夫が校舎をうろつく長田を発見する。夕闇の中、ひたすら何か探している長田を。SF映画のミュータントさながらに痩せこけて目が爛々と光る長田を。ひで夫は翌日、何故か嬉しそうに皆にそれを話した。

「怖かったんだってばよ！ あれがたぶん家出の原因だ！」

以来、長田は学校のどこかに潜んでいて隙を見ては物を探して持っていくという噂が流れだした。普段は理科準備室や倉庫に住んでいる、と。

先生達も調べてたが、常識的に考えて当然いるはずがない。でもやがてひで夫以外の生徒まで見たと言いだした。

俺の妹も見たと言っては、怖いから学校に行きたくないと母親に泣きついていた。もちろんそんなことが許されるはずもなく、毎朝俺に無理やり連行されるんだが。おかげで俺はいつも嫌われたもんだった。

夜に母親が仕事に行く時は、妹が一人で寝るのを怖がって勝手に俺の布団に入ってくる。俺はいちいち眠くて追い出すのも面倒だから無視する。

長田は徘徊するし、事件はエスカレートしていく。

今度は階段の上から長田に突き飛ばされる奴が続出した。その中で飼育係の酒井麻子が背中を押されて転落した。急いで向かうと、酒井の太った体は頑丈そうで肘が赤らんだ程度だ。たいした怪我でもないのに鼻水出して泣いてて馬鹿だなって思っ、俺はつい笑った。ひで夫は横で「長田の怒りを買ったんだ」と呟いた。

噂では教室の移動や忘れ物なんかで一人になると長田にやられるらしかった。とはいえどうして便所にまで誰かと連れたって行かないくちやいけない？ 馬鹿馬鹿しい。

それは昼休みだった。

便所から図書室への帰り、人の少ない理科準備室前の階段を降りはじめた時だった。俺は音もなくフワツと背中を押された。必死で空間を掻くが、落ちていく体を支えるものはどこにもない。

俺は頭から転がり落ちながら階段の上の人物を見たが、明らかにそれは女子で長田ではなかった。手摺りを掴んで立ち上がるとすぐにダッシュで太い腕を捕まえた。

酒井だった。

わけがわからなかったが、目の前で壁を叩いたりロッカーを蹴ったりして問い詰めると酒井は泣いて謝った。

「私、二田君に突き飛ばされたと思ったの」

酒井は背中を押された時、犯人の顔を見ていなかった。誰が押したかわからなかったのだ。ただ気がついたら噂の長田のせいになってたらしい。

「どうして俺だと思ったんだよ」

犯人を知らないことを周囲の占部久美や友達に話すと「長田じゃないの？」、「そういえば酒井さんが泣いてるの見て二田笑ってたよ」、「二田が突き飛ばしたんだ」、「だったら許せないじゃん。仕返ししてやろうよ。仕返ししないの？」、「あたし達も二田には困ってて……」と言われて断れる雰囲気ではなくなったから。

辻先生は犯人探しはしないと言っていたから、言っても無駄。今

度背中を押されたら死ぬかもしれない。やられる前にやってやろう。そういう気持ちもあった。

ブタ面の酒井はフゴフゴしゃくり上げながら、概ねそういったことを話した。やられる前にやる。俺はその気分がよくわかる。打ち所が悪ければ首の骨を折って死ぬところだった。このブタはそんなに悪くない。諸悪の根源ではない。むしろ俺がブタだ。悪いのはブタだ。ブタがブタをブヒブヒ笑ったのがブタなのだ。わけがわからんぞ！

俺の背中を押したのは酒井だった。もはや長田は関係ないのだ。じゃあ酒井の背中を押したのは誰だったんだ？ それに他の奴らの背中を押したのは？ あいつらは「誰に何をして」背中を押されたんだ？ 誰が加害者で誰が被害者なんだ？ 俺は誰の背中を押した？ぬるい靈感が背骨をじつとりと伝う。

俺は自分が腹いせに長田の巾着袋を隠したことを思い出す。長田が今も血眼で探しているだろう巾着袋のことを。俺はそれが奴にとってどれほど大事なものか知らない。

冷や汗がこめかみを伝う。

急いで中庭に走って雪に埋もれたままの巾着袋を掘り返そうとしたが、積もりに積もった雪は目印にしていた岩さえすっぽり隠してしまっていた。指は赤くかじかんで動かなくなり俺は途方にくれる。雪は容赦なく降り続けている。もう取り返しはつかないのだ。

次の日、登校の途中にふと目をやると校庭の端にある飼育小屋に先生達が集まって何か話していた。

教室に行くと生徒達に囲まれて朝からまた酒井が泣いていた。

「何かあったのか」

俺は鞆を置いて隣の横浜ひで夫に尋ねる。

「飼育小屋のウサギ六羽とニワトリ八羽が消えたんだよ。長田はもう止まらないな」

ひで夫は嬉しそうに笑う。

俺は眩暈を覚える。俺達はもっとひどい目に遭うかもしれない。

教室がぐんにやりと灰色の飴細工のように歪み、長田の笑い声が聞こえた気がした。破滅的な、躁的な。

「お前のせいだからな！」

びくりとして振り向くと、それまで飼育小屋なんて気にもとめなかった男子達が一斉に酒井を責めていた。対して占部を筆頭とした女子達は酒井の味方だ。

「ちょっと、酒井さんが可哀相でしょー！ 酒井さんはちゃんと昨日も飼育小屋の見回りしたんだから……ね？」

酒井の丸々とした体が強張る。嘘を吐くのが下手だな。昨日は俺を突き飛ばした後、泣き腫らした顔でそのまま帰ってしまったのだ。昨日の夕方から今朝まで飼育小屋は放置されていた。もちろん飼育係は各クラスに一人ずついるんだから一人休んだところで本来は問題ないはずだが、他の飼育係はいつも酒井に任せきりだったのだ。このブタはそれを説明しようともせず泣くことしかない。俺は苛々するッ！

「あのなー、酒井は」

とつぜんドアが開いて、今にも泣きそうな顔の辻先生がやってきた。なくしたもののリストには先生の手によってすぐさま「ウサギとニワトリ（みんな）」と書き加えられた。そこにいた全員が黙った。その日も誰かの物がなくなり、誰かが階段を突き落とされた。奇妙なことに、学校中が慣れてきていた。理由もなく突然の悪意に晒されることはよくあることなのだ。それが学校にやってきたというだけで仕方ない、と。

帰りの会が終わわり、俺は下駄箱を開く。はらりと落ちてきた紙を反射的に掴みポケットに入れる。外靴に履きかえて外に出て目立たない場所で読む。丁寧な字だった名前が書いていない。

「話があります。放課後。林の沼」

林の沼は小学校と俺の家を繋いだちょうど中間あたりにある心霊スポットだ。不法投棄されたゴミが大量に埋まっていて、そこで猫

や犬のバラバラ死骸が大量に発見されたことがあるのだ。Q…ウサギやニワトリはどこへ消えたのでしょうか。A…林の沼？

怖い。

怖いに決まってる。だから誰も近寄らないし落ち着いて話ができるのだ。

林の沼は、夕日で微かにオレンジ色に光る雪が美しかった。ザクザクと雪を踏みしめながら、俺はそこにいたドラえもんじみた丸いシルエットに声をかけた。

「あ、二田君……その」

おどおどした酒井は困った顔で俺を見た。

「話って何だ」

「飼育小屋の子たち……大丈夫かな？」

酒井が俺に気休めの言葉を期待しているのがわかって不快な気分になる。お前は俺を階段から突き落としたんだ。何慰めてもらおうとしてんだよ。

「大丈夫なわけないだろうよ。何の目的もなくウサギやニワトリを盗むわけがない。多分身一つで生活している長田が食料にしたんだ」
急に酒井が近づいて俺の目を覗きこんできた。鼻息が当たる。こんなに雪が降ってるのに暑苦しい。

「本当にそう思ってる？」

「……思ってたねーよ。そんなの、長田は野生児かってんだよ」

酒井が眉をひそめて頷くと二重あごができた。オイルの浮いた沼に雪を蹴飛ばす。

「先生や占部さん達には言っていないけど、私ね。長田くんが家出する一週間くらい前、公園で見たの。ブランコにいた。そして隣には人がいたの。その人は……笑わないでね。『誰だかわからなかった』の」

「どこにも笑う要素がないぞ」

慌てて手を振る。

「違ッ……！ 知らない人って意味じゃなくて、男か女か大人か子

供か全然わからないの。髪型も顔も身体の形も歪んで、そこだけピントがズレてるような。いたことだけは確かなのに。きっとその人が長田君を――」

「なあ。ちと疑問に思ったんだが、どうしてそいつが『人』だと思っただんだ？」

俺は積み上げられた雪まみれのテレビや廃材を蹴飛ばして沼に落とす。ぼちゃん。水面が弾けて雪に染みが点々と散った。夕日が落ちて、林の沼は静かに黒い影を増やしていく。

「人に似た何か。ニンゲン？　よくわからないの」

「ああ、だから警察や先生には言っていないのか。それでどうして俺に？」

酒井は珍しく目を真っすぐ合わせて俺を見た。

「……二田君は私の話をちゃんと聞いてくれそうだったから」

よく意味がわからない。謎だらけだ。謎ばかりが増える。ニンゲン？　酒井め。なんてことしてくれたんだ。

俺は酒井に手を振って別れる。数十歩いってから振り返ると、酒井も振り返ってこっちを見ていた。最悪のタイミングだ。慌ててお互いに走るように帰る。頬が熱い。

家に帰ると妹の「今日は友達の家泊まります」という書き置きと、昼頃のものと思しい母の書き置きがあった。皿にのせられた真っ黒いオブジェが重しにしてある。

「見てわかる通りオムライスです。チンして食べなさい。お腹が痛くなったら正露丸を飲みなさい」

ご丁寧に横には正露丸の瓶が置いてある。さすが看護師。

オブジェの端の方をスプーンで削って食べると何故か舌が痺れたのでラップして冷蔵庫に入れた。あんなもん自分で食え。

俺はかわりに適当な肉と野菜と味噌を取り出して米を炊き野菜炒めと味噌汁を作る。テレビを点けて若手芸人が痛めつけられてるのを見ながら「あーうめえ。俺は天才かもしれん」と一人で炊きたて

の飯を食う。残ったものはラップする。

風呂に入ったらソーダアイスをくわえたまま自分の部屋に行き布団に体を投げ出す。アイスの棒をゴミ箱に捨てて明かりを消す。

「さて」

暗闇の中で俺は飼育小屋の動物達はどこにいるのか考える。この寒空の下だ、外ならまず死んでるだろうが酒井のために見つけてやりたい。

「二田君は私の話をちゃんと聞いてくれそうだったから」

何度も脳内でリフレインする。俺はちゃんと聞けたんだろうか。

そして巾着袋の中身も気になる。持った感じはプラスチックっぽい固さだったが。長田はまだそれを探して校舎を徘徊し、誰かのもを盗んだり階段から突き飛ばしたりしてるのか？

長田は酒井が目撃したという謎の「ニンゲン」に唆されたのか連れて去られたのか？ 全ては「ニンゲン」がやってるのか？ 考え疲れて眠くなってうとうとしていると妹がそっと俺の布団に潜り込んできく。俺はいつものように無視を決め込もうとして、それがないことに気付く。

——妹は友達の家泊まりに行っている。じゃあ今布団にいるのは誰だ。

俺は身動きがとれない。下手に刺激するのも怖い。「そいつ」は俺の体にすりよってくる。微かに生臭い。血の臭いだ。

気がつくと朝になっていて「そいつ」はどこかへ行っていた。居間に行くともテーブルで母が昨日俺が作ったメニューを食べていた。

「この味噌汁の味濃いよ。ご飯のおかずにはなるけど」
うるせえ黙って食え。

「あとあんたねー、玄関の鍵開けたままだったわよ。不用心でしょ」

学校に行くと皆がニヤニヤして俺と酒井をからかってくる。昨日

林の沼で二人で話してたのを誰かに見られたんだろう。酒井は顔を赤くして首を振り、俯いて目を合わせない。また泣くのか。

後ろの黒板には相合い傘が描いてある。その隣、なくしたもののリストには何のつもりか「いのち（ウサギとニワトリ）」と加えられている。善意か悪意かわからない。

俺はクラスを見回した。そして占部久美が来ていないのに気付く。

「占部さんは今日、学校には来れません」

辻先生は泣きながらそう言った。

結局それ以降、俺は占部の顔を見ることはなかった。後になってから占部はノイローゼで部屋に閉じこもるようになり「肉類」を全て食べられなくなったと聞いた。

あの日、占部の家には警察が言うところの「いたずら」がなされていたのだった。その犯行は深夜から朝にかけてだった。駐車場や庭にニワトリやウサギがズタズタに切り刻まれてぶちまけられていた。犯人は別の場所で殺し、ご丁寧にもその時の血も取っておいて玄関や車に塗ったり雪に撒いたりしていた。

占部久美の部屋は二階にある。そのベランダにウサギの耳とニワトリの足を結んだものや目玉がくり抜かれた頭が沢山投げ込まれていた。合計二十八個の目玉は郵便受けにまとめて入れられていた。複雑でねちっこくて足元から臭い立つような悪意だった。

そして——ようやく吹雪も止んだ頃、俺達は卒業式を迎えた。桜は咲いていない。長田も占部もない。酒井は終始困ったような顔で俺を見ってくる。ひで夫は卒業式に長田が何か特別なことを仕掛けるに違いないと言っていた。例えば毒ガス。例えば爆弾。例えば自殺。その全てが伝説になるのだと。

……中二病もほどほどにしろ。

結論から言えば長田は何もしなかった。ただ姿を現しただけだった。卒業証書はもらえなかったが。

体育館での全体の卒業式が終わった俺達は、それぞれの教室に帰

って担任の先生から卒業証書をもらう。

「証書を渡す前に」

辻先生はいつも通り泣きながら話を始めた。

「今日は天気が良いですね。分厚い雲が消えて吹雪が嘘みたいです。長田君や占部さんもきつと喜んでいるでしょう」

誰しも長田、という言葉を言うのでさえ躊躇うようになっていたから教室がざわついた。

「初めに言っておきますが、先生は長田君が大嫌いでした。皆さんは去年、私が弓子の出産で休んでいたのを知っていますね？ 実はあの子は生まれてないですよ。たまたまスクーターを無免許で運転していた長田君は妊娠していた私に時速50キロ程度でぶつかりました。悪意はなかったようですが、飲酒も行っていたようです。目が合いましたが彼はそのまま逃げました。打ち所が悪かった私は流産しました。その時から私はすぐに涙が出るようになりました」

辻先生は涙を流したままニコリと笑う。でも目は笑っていない。

「長田君はそのまま逃走しました。警察は目撃者もなく証拠がないせいと、彼がまだ小学生であり未来があることから詳しく調べませんでした。『犯人探しはしない』と言われたことがある皆さんならその時の私の気持ちがわかるのではないかと思います。私は退院して母親と長田君に会いに行きました。彼は全く悪びれるでもなく反省もしていませんでした。長田君は俯いたまま首を振り続け、『それは本当に勇次だったのか』『勇次ではない』と母親に言われました。私は長田君に復讐しようと思いました。私の夫は復讐計画ばかり話す私の相手をしていてストレスで鬱になって入院しました。これで私を止める人は誰もいなくなりました」

教室中が静まりかえってスズメの脳天気な声が響いた。

「職場に復帰し、長田君と久しぶりに会うと何事もなかったかのような態度でした。私が怒っていないと思ったのでしょね。六年生になった皆さんを見ると、友達ごっこが遥かに上手になっていて笑いました。まず長田君に虐められている横浜ひで夫君に気付き

ました。そしてこのクラスの全員が長田君に叩かれたことがあり、その横暴さを心の奥では恨んでいること。更にそれぞれがそれぞれに悪意を持っている人がいることにも気付きました。それでも皆さんは仲良くやっていたのが馬鹿らしかったです。そこで私は教室の後ろに『なくしたもののリスト』を作って失くなったという現象を明確にして、皆さんの大事な物を盗っていききました。案の定、皆さんはそれを長田君のせいだと思うようになりましたね」

辻先生はあくまで微笑む。他のクラスの明るく騒がしい声が聞こえる。

「私は頃合いを見て泣きながら、犯人探しはしないことを皆さんに伝えました。もう自分でなんとかするしかありません。私はあなた達の上辺だけの人間関係や悪意を解放しました。あなた達は何をしましたか？ さあ、皆さん。中庭を見てください。久しぶりの強い日差しです。桜ももうすぐ咲くでしょう。雪も溶けてきてるでしょう」

皆が廊下に出て窓から白い中庭を見た。中庭に先生達が集まってきた。その中心には見覚えのあるトレーナーがあった。雪に頭を突っ込んでいる長田だった。俯せで死んでいる。

辻先生は相変わらず無表情に涙を流していた。

「教室に戻りましょう。横浜ひで夫君、あなたは彼に何をしましたか」

先生が教壇から指名する。

「べ、別に何も……」

「そうですね。あなたは長田君には何もませんでした。長田君が怖くてしょうがなかったんでしょう？ だから彼に心酔する。何故かいつも自分ばかりが叩かれている気がする。それが他の人にまで広がるのは嬉しかったから。では浅野さん、あなたは？」

クラス委員の浅野はびくつきながら答えた。

「長田君のせいだと思って、算数の教科書を中庭に埋めました。私の大事な本が取られたから、ちょっと困ればいいと思って……雪が

溶けたらどうせ出てくるし」

隠したのは俺だけではなかったのだ。俺だけに責任があるわけではないのを考えると少し気が楽だった。

「その大事な本とは何ですか」

「ハリー・ポッターです」

「ハリー・ポッターですか。私も好きですよ」

先生はそうして皆に聞いていった。多くの奴は雪に隠したから、長田のものはほとんど雪に埋められていたことになる。それも今から死体が続いて出てくるんだろう。

「二田君、あなたは？」

「俺は筆箱がなくなって、腹いせに何か長田のものを隠そうと思ったんです。でも皆が隠した後だったからだと思うけど、全然ものがなかった。仕方ないから机の横に掛けられてた巾着袋を中庭の雪に埋め……」

言い終わらないうちに突然先生はフツと笑った。

「袋の中身を見ましたか？ 大当りでしたね。あなたは他の人より念入りに深く埋めてましたよね」

自分の汗が引くのがわかった。俺は見られていたのだ。

「いや……中身は知りません」

「見てなかったんですか。あの中身は喘息の携帯吸入具です。貧乏な彼は一つきりしか買ってもらえていません。彼は喘息の発作が起きると苦しくて動けなくなります。だから彼は放課後も必死に探してたんですね。“たまたま”通り掛かった私は彼に言いました。『そういうえば中庭に誰かが何か埋めてたような』と。彼は急いで中庭で巾着袋を探し始めましたが、掘るそばから吹雪で埋まり、空気も乾燥していますから当然発作が起きました。彼は咳込み、雪に埋もれて声もあげられずにやがて動かなくなりました。冷たくなって死にました」

先生は歩いてきて俺の肩に手を置いた。肩から内臓に振動がきて胃液がグルグルとうねって吐きそうになる。

「そこから私の予想外に皆さんは混乱していきました。まだ盗みは続いていて、お互いに仲の悪い相手がやったに違いないと見当をつけて盗り合っていましたね。そこで私は監視カメラを学校中に設置して観察することにしました。横浜君がリードするような形でいいし、長田君が噂になり、それを隠れみのにして皆さんが何をするかに興味があったんです。環境のせいで長田君は他人の子を流産させても謝らない性格になったのか、それとも彼の生来の性格なのか。誰しも自分がやったという証拠が残らないなら何をしてもいいと思うのか……見知らぬ誰かの悪意にさらされた時にどうするのか」

先生は今度は占部の席に行った。そして机を撫でた。

「そして――皆さんは素敵に暴走しましたね。階段から突き落とされる人が続出しました。このクラスでも何人も被害に遭いました。その始まりは横浜ひで夫君です。彼は長田君が例の巾着袋を探しているのを見ていました。その様子を語ることで皆さんに恐怖の対象としての『長田』を植え付けました。更に他人の背中を突き飛ばして逃亡、噂の『長田』のせいになりました。いつも長田君に叩かれていた彼が一番最初が変わったのです。恐怖を受ける側から与える側に。それも自分が非難されることなく。虎の威を借る狐といったところでしょうか。私が見ているとも知らずに周囲を見回して誰もいないのを確認して躊躇せず押しましたね」

ひで夫の顔が青ざめていた。彼はこの後、中学校に上がっても今回の件は皆に忘れてもらえず、結局正義漢や良識を持った一般生徒どもにいじめられたあげく登校拒否になった。俺はそれから姿を見ていない。

「そんな容赦のない暴力を受けたのが占部久美さんでした。彼女は私にバレていないと思っていたようですが、日頃酒井麻子さんをデブ女と罵って押尾美紀さんや上地優子さんらと一緒にいじめていました」

全てが実名だけにクラス内がどよめいて、次は自分ではないかと怯えた雰囲気が充満する。まるで初めて飼育小屋にやってきたウ

サギ達だ。押尾と上地にクラスの目が向いた。

この後、中学校に入っても二人は特に問題にされなかったが、高校の時に揃って某カルト学会に入信して今では誰にも相手にされない。

「占部さんは自分を突き飛ばしたのが誰かわかりませんでした。そこで自分がどれだけ大変な被害者か、私に訴えて犯人探しをするように言ってきました。私には特に同情できませんでしたから軽く笑って『足を滑らせたんでしょう?』と言ってあげました。占部さんが犯人」横浜ひで夫君に気付くか見物でしたが、彼女は虚像の『長田』に恐れを抱き、自分より弱い相手に攻撃を加えることで代償としたのです」

辻先生は酒井の背後に立つと、耳元に口を寄せた。先生の涙がぽたりと酒井の肩に落ちた。服に染み込んでいく。

「そうですね? 酒井さんは占部さん達に前より酷くいじめられて生理不順になったのですよ。それから酒井さんは占部さん達に背中を押されて階段を転げ落ちました。犯人の顔は見いていませんでした。占部さん達はあなたに嘘を吐いて大好きな二田次郎君を階段から突き落とすように扇動、強制しました」

先生がまた俺の方へ来た。ファンデーションの粉っぽい匂いがする。

「そして酒井さんは二田君にわざと捕まって助けてもらいました。好きな人と仲良くなれてとても良いことだと思います。でも酒井さんは満足しませんでした。このクラスで監視している私に唯一感づき、尋ねてきたのです。『誰が私の背中を押したんですか。見てたんでしょう?』と。質問には答えるのが教師です。『占部さんです』」

辻先生は占部の机に座った。

「酒井さんも『長田』という亡霊に隠れて復讐を始めました。飼育小屋のウサギやニワトリを全て連れ出したようです。そこからは私にはわかりませんが、校外のどこかで殺したのでしょう。何にせよ、雪が隠してくれますからね。それから皆さん知っての通り、死骸を

酒井さんの家に撒きました。そうですね？」

酒井は頷いた。

「はい。私は以前も林の沼で猫たちを殺したことがありましたから慣れていました。今回もそこでした。占部さんは大嫌いです。ああなって良かったと心から思います。初めは皆が止めてくれたいじめが、段々ふだん通りの風景になって、私がいじめられるのが普通になっていました。特に長田君の噂があつてからはこのままでは自分が殺されても誰も不思議に思わないのかもしれないと思って――こうなりました」

酒井は俺の方を全く見ない。先生はうんうんと深く頷いた。俺は立ち上がる。

「酒井、お前まだ言っていないことがあるよな。林の沼で言ってた『ニンゲン』のこと」

酒井は困った顔で笑った。俺にはその気持ちがわからない。

「あれは嘘。二田君に怪しまれないように。そのくらい私は用意周到にウサギたちを殺して復讐したの。占部さんがあなつて本当に良かった」

「じゃああの夜、どうしてお前は俺の布団に潜り込んだんだよ」
クラスがざわめいた。先生も知らなかったらしく黙って聞いている。

「血の臭いでわかった。あれはお前だろ。ウサギ達を殺した後のお前だ。自分のやらかしたことに恐ろしくなつて俺の布団に来たんだ。鍵はどうしたか知らないけどよ」

「妹さんから鍵を盗んだから」
どこまで悪いんだよ。

「私、二田君だけが頼りだから。占部さん達に殺されそうで、皆に無視されて、でも二田君は私の話を聞いてくれるから」

クラス内でヒューヒューと囁し立てる奴が何人かいる。それを誰も止めない。こんな時に、頭おかしいんじゃないのか？ もうこのクラスはおかしくなつてゐるんじゃないか。辻先生のせいで。

「皆さん、聞いて下さい。私は今日の卒業式に際して、占部さん到手紙を渡しました。彼女の中ではいまだに長田君が生きています。ウサギ達のみならず次は彼女を殺そうとしていると思っています。私はそれを利用して、手紙に書いておきました。占部さんの気持ちがわかること。私の流産のこと。長田君が全ての元凶だということ。それを育てた母親が最も悪いこと。長田君を苦しめるためには母親を殺すのが大事なこと。卒業式の日には長田君の母親も来ることをしたためました。何せ私が母親を呼び出しましたからね。『行方不明の長田君が現れるかも』って」

辻先生は晴れやかな顔で、もう一度廊下に行って窓を見た。俺も行く。長田の死体の傍で女が泣いていた。母親らしかった。そこへ占部が現れた。裸足だった。人だかりを掻き分け、母親に近づいて包丁で刺した。

「長田君も占部さんも現れて、これで全員揃って卒業ですね！卒業おめでとう。中学生は大人ではありませんが、確実に皆さんは中学生の中では精神的に大人になったと思っています」

先生はそう言って卒業証書を配り、後日警察に自首した。

占部は少年法で逮捕はされなかったが、県外の中学校に進み、やがて消息を絶った。行方不明らしい。そのうち長田みたいに散々悪意の媒介者となって雪の中から出てくるのかもしれない。

酒井もどこへ行ったかわからなかったが、最近偶然にも会うことができた。たまたま行った風俗で働いていた。デブの面影は消えて綺麗になっていた。性格も明るくなっていた。

「やらないの？」

サービス業の顔で聞かれても、初恋の人を風俗で見つけて萎えない奴は珍しいだろう。他にも色々思い出してしまうし、やれるわけがなかった。

結局天気のことを話した。

「今年は雪が降らないな」

「そだね」

酒井は俺に体をぴったりくっつけてきた。すぐに俺は距離をおく。そして聞きたかったことを話す。

「なあ、あの時、『ニンゲン』は本当に見たのか？　嘘だったのか？」

酒井は唇に指を当てて考える。

「んー、忘れちゃったな。でもそんなオバケみたいなモノっていると思うよ。それで、いつも誰かの後ろにくっついてて、階段で背中を押すの。落ちた人は何も考えらなくなって、自殺したり殺したりするんだと思う。そうとでも考えないと、私達がああ時に陥ってたヘンな空気とかが、辻先生が言ってたように皆の本音だとしたら怖くて生きていけないよ」

酒井が酒井なりにあれを捉えていたことが俺は少し嬉しかった。ニンゲンはもうどうでもよかった。

「酒井さー、俺と友達ごっこしようぜ。辻先生は間違ってるよな。友達ごっこにはちゃんと意味があるんだよ。傷の舐めあいっていう」

それから俺達はなんとなく、時々会って話すぐらいの関係だ。何もなかったように、お互いに触れたくないところには触れない。布団で一緒に過ごした夜を思い出さないように、セックスもしない。監視しあうのに近い。

あんな吹雪はもう二度とこないだろう。沼は隠されることなく悪臭を放ち続ける。それで良いと俺は思う。

(後書き)

読んで頂きありがとうございます。ぜひ感想などお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0890t/>

雪原アポカリプト

2011年11月2日03時18分発行